

編集後記

ちょうど一年前、私たちは「復興共生プロジェクト」事業の一環として『東日本大震災 石巻専修大学報告書』を刊行した。「激震に揺るがず～石巻専修大学が守りぬいたもの 東日本大震災下で果たした大学の使命」というサブタイトルを付したように、震災時からその直後の本学の状況と各部署の動き、およびそれから約一年間の学内外の動向を全教職員と学生の全面的な協力を得て一冊の記録集に編み上げたものである。

それは震災を乗り越えた私たちの記録であり、本学の歴史の一里塚に、と位置づけるとともに何らかの意味で各地の大学関係者や一般の人々が今後の防災を考える上で参考になればという願いを込めて出版された。各方面に送付したところ、幸い予想を越える反響があった。

本書は、その続編すなわち第2号である。この一年、当然のことながら本学においても、あらためて「3・11」をふり返ると同時に復旧・復興に向けてのさまざまな取り組みがなされた。その本学における教職員および学生諸君の活動を記録するとともに、今後解決しなければならない課題について考える材料を提供しようというのが、この第2号の基本的なコンセプトである。

このような基本方針にもとづき、私たちワーキング・グループは、議論の末、前号とは異なったいくつかの試みをしてみようということで意見が一致した。

一つは、震災が本学の教育にどのような影響を及ぼしたかについて、全学的なアンケートを実施し、授業すなわち教務、学生生活、教員・大学院生の研究、さらに通学・通勤などの各分野ごとに集計したことである。また、この一年間に教員が実施し、また関わったさまざまな研究や復興支援活動および学生のボランティア活動を掲載した。これは、かなり詳細なデータとして評価されるのではあるまいか。

二つ目は、「外からの視点」の導入である。防災の第一人者、関西学院大学の室崎益輝教授にインタビューを申し込み、自らエネルギーに活動した阪神・淡路大震災の経験から見たこのたびの行政および本学の対応について語っていただいた。また、想定される東海地震の影響を直接に受けるであろう静岡県にワーキング・グループから山崎達也教授および相澤浩美・事務課主任を特に派遣、静岡大学防災センターおよび静岡県防災センターを訪問して意見交換およびさまざまな質疑を行った。持ち帰った膨大な資料のまとめとして、実に20頁を越える紙面を費やしている。

継続は力であり、語り継ぐことの大切さは言うまでもない。この第2号の発行が第1号と相まって貴重な資料として本学および全国各地で読まれることを期したいと思う。

最後に、惜しみない協力をいただいた静岡大学防災センターおよび静岡県防災センターの皆さま、本学の教職員および学生諸君に感謝申し上げるしだいである。

震災報告書編集ワーキング・グループ 委員長 大津 幸一

※本報告書は文部科学省「大学等における地域復興のためのセンター的機能整備事業」(H23～27)のH24年度助成を受けて発刊された。